

炎症性腸疾患鑑別診断アトラス

赤松泰次・斉藤裕輔・清水誠治 編集

東京医科大学客員教授

酒 井 義 浩

元来アトラスは地図帳であったようだが、いつのまにか図譜を指す。だから多くの図が必要であり、そのために長い年月か多数の協力者、またはその両方を必要とする。本書は内視鏡に青春をかけて、今や重鎮とも言うべき3名の編者を得て、多数の執筆陣からなる豪華な出来栄になっている。

しかし、先にひとつ苦言を加えれば、「下血」の表現である。下血は上部消化管出血のメレナの邦語訳である。タール便ともいう。であるから、大腸には有り得ないはずであるのに、堂々と登場するのは困ったものである。指導者が、また本書のような指導書が、誤った用語を表記すると、誤りを伝播することになり、その責任は重い。忙しい編者が提出された文章をすべて点検することは無理かもしれない。が、一点の誤りが命取りになりかねないことから、誠に惜しい失点になってしまっている。別に目くじら立てなくたって…という意見もある。みんなで使えば怖くない…とも言われる。しかし、用語というのはすべて定義があることを忘れてはならないし、仮に翻

訳して世界に出すときに、恥をかかないようにしてもらいたいものである。英語で出版しても、充分評価されうる内容であるだけに遺憾としか言いようがない。

そうはいうものの、序文にも述べられているように、炎症性腸疾患といえば、潰瘍性大腸炎とクローン病であるが、本書は広く腸の炎症を網羅するだけでなく、炎症と鑑別を誤るかもしれない腫瘍をも例示し、さらに所見別に、例えばびまん性の場合、縦走潰瘍の場合、敷石状を呈する場合、アフタの場合、多発する円形・不整形潰瘍の場合、多発する隆起の場合と、実に念を入れて項が立てられている。さらに診断のための方法論も紹介されている。実に行き届いた配慮である。さらに要所要所に息抜きとも言える本音が語られていて、つい引き込まれる。内視鏡像だけでなく、図表も必要に応じて挿入され、しかもご丁寧にポイントまで指摘してある。まさに至れり尽くせりの図譜といえよう。編者の情熱と統括した方針がよく判る構成になっており、ページをめくっていても小気味良い。分担執筆は時とし



て、編者の意向から逸脱して、注文外の記述や図表が並ぶものであるが、多くは節度が守られていて、秀麗な内視鏡像とともに見応え、読み応えがある。珍しい疾患ではいささか古い像が登場するのは止むを得ないであろうが、そこは編者の威光で、他の著者などの協力をえて差し替えがされれば、読者にとってはさらに有益であったろう。

●B5 頁314 2010年 定価9,975円
(本体9,500円+税5%)

南江堂 刊 (☎ 03-3811-7239)